

の木目細かに、その姿やさしきから、昔は御所にうぐひすの名にも呼れしが、おなじつとめの夜ふくる時は、走水の下のころびねがちなるを、よそのいがきの目にもれしより、さらでも住うき傍輩の中には、はしたなき間、鍋の口さし出、杓子の曲り心よりうき名は立そめ、炮烙さへ仲ま破れして、あくくれ茶釜にふすべられ、なら坂やわさびおろしのふた面、ともかくにもた、すむかたなく、身をあへ物の顔よごれぬれば、買臣が妻の耻をいだき、手ならひの君のむかしを思ひ、つひには土にかへるべき、無常をや觀じけむ、ある夜鼠のある、まぎれに、棚の端より身を投げるにぞ、顔かたちかけ損じ、見にくきまでの姿にはなりける、かくては食物のつとめ叶はじとて、あるじの怒りはなはだしく、石漆の妙薬にも及ばず、妹背の中も引わかれ、内庭まで下られたれども、猶さみだれの折々は、雨もりの役につらなれば、いと、長門の涙かはく隙なく、こゝにもすはりあしくなりて、井戸端にころがり出、蓼津に埋れて後は、たれ哀とふ人もなかりしに、ほどなく露霜も置うつり、壁の虫の音もかれゆく比ならん、間ちかき寺の門番にひろはれ、ふた、び部屋にかくまはれながら、ならはぬ火鉢にさまをかへ、酒をあた、め、茶を煎じて、ことしは、こゝにうさを忍びしに、や、春雨に梅もちりて、きさらぎの灸もすめば、また灰をさへ打あげられ、唐がらしといへるものを植られしが、からき目ながら、さてあらばあるべきを、それさへ秋のいろみ過ッ、つゝに橋づめの塵塚によごれふし、果はさがなき童部の、ま、ごとにくだかれ、行へもしらぬ闇の夜の、礫とはなりけるとぞ、

〔萬寶全書〕日本古今焼物之目録

備前焼物之事略 ○中 摺鉢等何も品々多し、

○按ズルニ、備前國ニ於テ製スル播盆ハ、其質堅實ニシテ容易ニ破損セズ、其刻セル線條モ、亦摩滅セズシテ久シキニ耐ユト云フ、